

まちのデザイン、
くらしのデザイン

〈連載〉
中川大介
西野鷹志
庄司証
長谷山裕一
米田哲平／小宮伸二
夏井俊介／近藤緑
押野友美／ふくだたくま
中村ひでのり



TAKE FREE



人をつなぐ、笑顔をつなぐ。
Connecting people and bringing smiles.



函館から世界へ。JTBは地球を舞台に、あらゆる交流を創造し続けます。

株式会社JTB

【北海道事業部 函館オフィス】

〒040-0011 北海道函館市本町6-7 第1ビル1階
TEL. 0138-56-1711 FAX. 0138-56-6898

【ホームページ】 <http://www.jtb.co.jp/hokkaido/> 【会社概要】 <http://www.jtbcorp.jp/jp/>



感動のそばに、いつも。

特集

まちのデザイン、 くらしのデザイン

p4

「思いがしみこむ」町に
変化し続ける江差町のデザイン

p5

歴史ある建物に新しい価値を
「港の庵」から見える風景

p9

岡本誠さん ●公立はこだて未来大学教授 に聞く
「参加型デザイン」が拓く可能性

p13

開港 5 都市景観まちづくり会議
2018函館大会

p16

テーマ「未来につなぐまちづくり～今、立ち止まって考える～」

函館市の景観行政検証報告書から

p17

街に関する一考察 ● 長谷山裕一

p19

人と水と空と森の話
防波堤から見えるもの ● 中川大介

p20

昔の子ども、今どきの子ども
道徳 ● 庄司 証

p23

連載 小宮伸二／近藤 緑／米田哲平／夏井俊介
ふくだたくま／押野友美／中村ひでのり

p24-27

【ライカはゆく】 ● 特別寄稿／第 10 話
一枚の葉書

p28

西野鷹志／文・写真

H I F インフォメーション INFORMATION

p30

本誌設置場所
FROM EDITOR・奥付

p34

cover illustration/Kunitate Tomoka cover design/Nakamura Hidenori

※本誌記事、写真、レイアウトの無断転載を禁じます。

FROM
EDITOR

大学3年の春、アメリカロサンゼルス近郊でホームステイした1ヵ月。初めての海外旅行は僕にとって衝撃的なものだった。特に気になったのが、大きな平屋の家に、回りを取り囲むグリーン芝生。ちょっとしたプールがあり、夏はそこで優雅に過ごすことができ、全てがビックサイズだ。その昔、「大きいことはいいことだ」というCMが流行ったが、まさにこの隣の家との距離感、ダイナミズムが、まちの景観を創り出していた。

一方、日本はというと、京都のように玄関が狭い、細長い造りの家が隣り合わせるように建てられている。北海道は、比較的広いつくりだが、昔ながらの長屋風の家だってある。隣が近いことで、「おすそわけ」文化が生まれ、「醤油の貸し借り」などができるわけで、近いからこそ生まれる絆がそこにある。

住んでいる人たちがあつたり、家のつくりであつたり、その他の環境によっても町は大きく変貌するものだ。それぞれの地域が持つ個性や、魅力を「まちをデザインする」そんな視点で探っていききたい。

(一財) 北海道国際交流センター(HIF)

事務局長 池田 誠



私たちは、「食」と「物流」を通して
地域の明日を考えます。



ヤマダイ大作運輸株式会社

【一般貨物自動車運送事業 取扱事業 第二種利用運送事業 (コンテナ)】
本社営業所 / 〒049-0111 北海道北斗市七重浜1丁目8番1号
TEL:0138-49-8119 FAX:0138-83-1942
札幌営業所 / 〒061-3271 北海道小樽市銭函5丁目50-4
TEL:0133-75-8008 FAX:0133-75-8833

株式会社 山大

【生鮮魚介類の販売、水産物の製造加工及び販売】
西桔梗工場 / 〒041-0824 北海道函館市西桔梗町548番3
TEL:0138-48-0231 FAX:0138-48-2125

株式会社 ヤマダイフーズプロセッシング

【納豆の製造・卸売り並び小売業】
小樽工場 / 〒047-0261 北海道小樽市銭函3丁目319-1
TEL:0134-62-7007 FAX:0134-62-7227

株式会社 YGフラッグシップ

【厚生労働大臣認可 一般労働派遣事業】
本社 / 〒049-0111 北海道北斗市七重浜1丁目8番1号
TEL:0138-48-0330 FAX:0138-49-0331

株式会社 函市作業組

【函館市水産物卸売市場構内の作業請負業】
本社 / 〒049-0111 北海道北斗市七重浜1丁目8番1号
TEL:0138-48-0330 FAX:0138-49-0331

株式会社 魚小路

〒221-0822 神奈川県横浜市中区西神奈川1-13-2
TEL:045-321-8148 FAX:045-324-4546

(有) 耶馬台国

〒049-0111 北海道北斗市七重浜1丁目8番1号
店舗 / 旬の味 ご馳走亭
〒040-0011 函館市本町11-8 TEL:0138-56-6888
旬酒肴 克月
〒040-0011 函館市本町5-18 TEL:0138-51-8881

まちのデザイン、 design くらしのデザイン

気に入ったデザインのモノに
囲まれて過ごす時間は心地よい。

万年筆、腕時計、ワイングラス、
食卓の椅子、自転車、住宅、町並みー。

すぐれたデザインは、心を満たし、
時間を豊かにする。

喜びを、だれかと共有したいと思わせる。

モノだけではないのかもしれない。

すばらしくデザインされたコト、

つまり仲間が集まるイベントや、
地域が沸き立つ祭りなどが
くらしの中に織り込まれれば、心は豊かになる。

まちを、くらしをデザインする。

そうして、それぞれの地域で
豊かな時間を過ごす。

道南にも、そんな取り組みはある。

幾つかの事例を通して、
「デザイン」のいまを考えてみたい。

「思いがしみこむ」町に 変化し続ける江差町のデザイン

北前船再び

江差町は人口約8300。江戸時代には「江差の五月は江戸にもない」と言われたほど、北前船の来航やニシン漁で栄華を誇った道南有数の歴史を誇る海辺の町だ。ニシンは搾りかすとして北前船で全国に運ばれ、山形の紅花、淡路島の菜の花、丹後の桑の木、四国の藍などを育てる肥料として重宝された。

そんな江差町が1986年6月、往事を思わせるにぎわいに包まれた。幕末の豪商、高田屋嘉兵衛の持ち船である北前船を復元した「辰悦丸」が、江差への大回航を果たしたのだ。淡路島

を出発し、かつての寄港地に一つひとつ立ち寄りながら、およそ50日かけて江差に到着するという一大プロジェクトだった。

淡路島で復元された北前船を、江差へ迎え入れる。江差の歴史を生かして、まちを元気づけようというその試みを実現させた立役者の一人が、江差町歴まち商店街協同組合の現理事長、萩原徹さんの叔父にあたる萩原猛志さんだ。40歳で亡くなられたが、思いは脈々と受け継がれ、役場も民間も一緒になってまちを活気づけようとする動きが江差に生まれたのだ。江差町で塗装店を営み、当時、自ら辰悦丸に乗り込んだ室谷元男さんは振り返る。「北前船で佐渡

日本遺産に選ばれた江差町。観光スポット「いにしえ街道」は、古き良き時代を再現した。



島の小木港、新潟港を回って無我夢中でした。江差に入港した時には鳥肌が立ってね」。北前船の再来は江差にとってもなく大きなエネルギーをもたらしたのだった。

「祭りに育てられる」

この大回航をきっかけに、江差の人たちは足元の歴史に目を向け、歴史を生かしたまちづくりに取り組み始めた。1989年には、江差が北海道の戦略プロジェクトの「歴史を生かす街並み整備モデル地区」に指定され、江戸末期から明治初期の町並みを再現した「いにしえ街道」の整備が動きだす。街道沿いの商業者らが92年に旗揚げした歴まち商店街協同組合の理事長を2015年まで務めた室谷さんは「江差にはかつての栄華の名残として、下町地区に数多くの間屋、町家、蔵、商家、寺院などがある。簡単に今のいにしえ

街道ができたわけではないけれど、一方で町民すべてが街道の整備の意味を理解していたわけじゃない。どう知ってもらいたい、理解してもらおうかが課題だった」と語る。

そうして知恵を絞ったのが、「いにしえ夢街道」イベントだ。江差には道内最古の祭りとして300余年の歴史を誇る「姥神大神宮祭」がある。みこしを担ぎ、山車を牽き、世代を超えて地域が一つになり、町外からも多くの人が訪れる。「江差の人々は祭りに育てられる。町外の人にも祭りに育てられる。そのつながりをもっと生かしたい」と、室谷さんたちは「祭り」をキーワードに、チンドン屋行列や町民野外劇、蔵を利用したコンサートなど、「職人芸が生きる『工芸品と食』」をコンセプトとしたイベントを始めていった。官と民、そして住民同士で議論を重ねながら、ついに2004年、延長1・1キロの「いにしえ街道」が完成する。電線が地下埋設されてすっきりとした街道に、横山家、中村家などの旧家、姥神大神宮が並ぶ。歴まち商店街協同組合は町並み整備に加わるにとどまらず、住民が観光客に歴史を語り伝える「百人の語り部」事業をスタートさせた。「人を巻き込み、人をつくる」を基本理念として、自分たちの住むまちをデザインしていったのである。

学生たちも巻き込んで

そんな動きに、町外から「巻き込まれた」のが江差町職員の岸田宏美さんだ。北海道大の大学院で都市デザインを学んでいたところ、担当教授と江差の前町長が会って「面白そうだから江差に学生連れて行こうか」と話が盛り上がったのが江差町との縁。2010年10月、院生、学部生の計10人が1カ月間、入れ替わりで江差に入り、移住者用



写真右より
室谷元男／むろや・もとお 江差町出身。「江差町歴まち商店街」元理事長。まちづくりグループ「江差いにしえ資源研究会」会長。富山から近江商人とともに江差に渡って4代目。
岸田宏美／きしだ・ひろみ 仙台市出身。北海道大学大学院工学院建築都市空間デザイン専攻修士課程修了。1級建築士。江差町役場勤務。
佐藤信喜／さとう・のぶき 旧熊石町出身。ひらたない荘などを経て、食彩酒房さと水を開業。檜山管内の食材にこだわる料理人。

の「お試し暮らし住宅」に住んで、町会社会館を拠点にさまざまなプログラムを実施した。一つ目は、町会社会館で町の

市街地の模型を作りながらの住民、観光客との交流や情報交換。二つ目はまちあるき。通りを歩きながら町民にリレー形式でインタビューし、若い人の働く場の少なさやまちづくりのあり方などについて多くの声を吸い上げた。三つ目が「私の江差」をテーマにした写真コンテストだ。そして四つ目が持ち寄りランチパーティー。26日間で12回開き、町民と学生が深い関わりを持つ場となった。

1カ月間の江差での生活で、学生たちが町民からたびたび言われたことがある。「祭りに来なければ江差に行ったことにならない」。それを聞いた担当教授が衣装を買ってくれて、再び学生たちを送り出したのが翌年の夏。以来毎年、学生が姥神大神宮祭に参加するようになった。

こうした関わりを通じて岸田さんは「狭い小路や青い海、そして町並みにひかれ」、室谷さ

んな多くの町民とつながりができたことも大きな後押しとなつて、12年に江差町職員になった。江差で結婚し、さらに愛着深まるこの町を、岸田さんがこれからどうデザインするのか、楽しみだ。

さまざまな資源を生かす

歴まち商店街協同組合は、さまざまな地域資源を地域内外の「交流」に生かす取り組みを展開している。一つは、2011年から毎年5月3日に行う「花嫁行列」。2組の花婿と花嫁が街道を歩き、江差追分の師匠が祝いの長持ち歌を歌う。町民も観光客も一緒になって2人を祝福する。もう一つが、2月から

まちのデザイン、

特集

くらしのデザイン



蔵や店舗約50ヶ所に200組のひな人形が飾られ、町は華やかに。

3月にかけて観光施設、店舗や民家など約50カ所に200組のひな人形を飾る「北前のひな語り」。12年に始まり、それぞれの家で眠っていたり、全国から寄贈されたりした人形やひな飾りを飾り、厳寒の江差を歩く人の気持ちを温かくしてくれる。

一方、江差の重要な歴史的遺産の一つである江戸期以降の土蔵を活用しようと、室谷さんらは町民有志で「江差いにしえ資源研究会」を立ち上げ、14年には、いにしえ街道沿いの土蔵を改築して「皐月（さつき）蔵チャミセ」を開店した。郷土料理の吸い物「けいらん」「岩のりソーマン」や「はちみつ抹茶トースト」といったメニューは女性会員が考案し、地元食材を使ったデザートも提供する。

「食」は、江差のまちづくりの重要な要素だ。町内で「食彩酒房さと水」を開いている佐藤信喜さんは、江差と同じ日本海岸の旧熊石町（現八雲町熊石地区）

出身。「上ノ国産天日干し米」や、命がけで採るのりとも言われる「檜山産天然岩のり」、大釜で煮込んだ「海洋深層水から作った塩」に加え、とげの多い「ガサえび」のてんぷらなどを提供し、江差にはこういう食材があるか説明しながら、江差の食ファンを増やしている。

「まちづくりは、『しみ込み運動』なんです。土蔵に貴重な歴史がしみ込んでるように、地域の人も、観光客も、ボランティアの大学生たちも、みんなの思いがしみ込んでゆく町になってほしい」と室谷さん。巻き込まれた人も、巻き込んだ人も、町並みを眺めながら良かったと言ってくれるまちを目指している。「自分たちは毎週のように函館に行っている人たちがと交流している。函館の人ももっと江差に来て、この町の面白さをわかってほしい」と話す。江差には、ほっとさせる空間があり、また湧いてやまないエネ

江差町のいにしえ街道をゆっくりと進む花嫁行列。



ルギーがある。人びとの力を源として、江差の「まちのデザイン」は常に変化し続けている。

まちのデザイン、
くらしのデザイン

歴史ある建物に新しい価値を

「港の庵」から見える風景

解体目前で

歴史ある古い民家や商家が残りながら、次々と失われていく。そんな函館市西部地区で、再生された1軒の古い商家がある。さまざまな人の気づきや思い、経験が集積して、よみがえった建物だ。市民が、建物の姿と、活用の仕方の双方を自らの手で「デザイン」した好例である。

函館市大町にある人工島「緑の島」へと渡る橋の手前に、「港の庵（いおり）」はある。1902年（明治35年）、米穀・海産物委託問屋を営んだ松橋象作が建てた「旧松橋商店」。三つの2階建ての建物で構成され、正面

は土蔵造り店舗で、奥に和洋折衷の木造の居宅兼事務所、そして蔵がある。現在は東京の会社が所有し、約20年間、空き家となっていた。

解体目前の2014年、この建物は市民の手で再生された。中心を担ったのは函館で古建築を観光関係の店舗に利用する清水憲朔さん、レストランを営む深谷宏治さん。そして、西部地区に建築事務所を構える富樫雅行さんだ。

残っていた往時の姿

清水さんとこの建物の出会いは、知人から素晴らしい建物が解体されると聞き、見に行った

復原された「旧松橋商店」の外観。古代ギリシャ風の鉄柱（ちゅうてつ）の柱とアールヌーボー風のレリーフが当時のまま残っている。



ことが始まりだ。ふだん何げなく通り過ぎていたモルタルやサイディングの外壁、トタン屋根の平凡な建物。中に足を踏み入れて驚いた。防火性の高いれんがの土蔵造り。梁（はり）にはカツラの太木を使い、立派な装飾のケヤキで作られた階段が残っていた。正面にはオールスノーボー風のしつこい製のレリーフも残っていることが後から分かった。2階には名木を使った床の間。木材がぜいたくに使われ、明治の凝った意匠が残された空間だった。

壊されてしまうのは、あまりにももったいない。清水さんは強く思った。幕末の箱館（現函館）開港後、多くの外国人が住んだ「居留地」を軸に開港都市・函館の歴史を研究する市民団体「はこだて外国人居留地研究会」の会長を務め、「古い建物は函館の財産だ」と常々思ってきた。「旧市街地である西部地区には、外観は変わっているけれど、中

は昔のままの貴重な建物がまだまだたくさんある」

けれども、その存続は危うい。人口減少や高齢化を背景に、全国的な問題となっている空き家の増加は函館でも深刻だ。「文化財に登録されている建物は残るだろうが、民間所有の建物はいつなくなるかわからない。私たちの『財産』はどんどん壊されている」と清水さん。どうしたら大切な市民共有の財産を将来の世代へ残し、「新たな価値」を生み出すことができるのかと頭をひねった。

絵はがきの写真から

清水さんは、函館市が伝統的建造物に指定している大正時代の建物をレストランとして活用している深谷さんに声を掛けた。維持することの大変さも、それができないからどんどん壊されているという現状も十分に理解しつつ、深谷さんは建物の



写真上より

清水憲男／しみず・けんさく 函館生まれ。（株）元町マリンハウス会長・はこだて外国人居留地研究会会長。1980年に古い教会を喫茶店として活用した西部地区における建物再生の先駆者。
深谷宏治／ふかや・こうじ 函館生まれ。スペイン料理レストラン「バスコ・オーナー」ははこだてソシエタ代表。毎年開かれる「函館西部地区バル街」の発案者でもあり、料理を通して西部地区の魅力を発信し続けている。
富樫雅行／とがし・まさゆき 愛媛県生まれ。富樫雅行建築設計事務所代表。西部地区に魅了され函館に移住。2012年に独立。西部地区の古建物リノベーションを手掛ける若手建築家として注目されている。

保存に取り組もうと決めた。「人がやったことのない事には面白さがある。函館にはその素材がある」

一方、清水さんと親交のあった富樫さんは道外の出身だが西部地区の町並みに「豊かさ」を感じ、自ら歴史的な建造物を改修して暮らしている。周りの古い建物が壊されていくことに危機感を覚え、壊される建物を残

すために仲間に加わった。

富樫さんが調べたところ、函館市中央図書館のデジタルアーカイブスで、当時の絵はがきに旧松橋商店の写真があるのが見つかった。そこから図面を起こしたが、れんが造・木造・土蔵で構成される大きな建物であり、修復費用が膨らむのは必至。修復の引き受け手は簡単に見つからない可能性があった。

「ならば自分たちで」

当初は改装した部分を店舗として借り手を探すことにしたが、建物の構造や消防法の問題もあり、一括して借りる人は現れない。利用したいと言ってくれた人もいたが建物の一部に限っての話だったため、不動産として活用することは難しかった。

清水さんらは思案の末、借り主があらわれるのを待つのではなく、まず自分たちで使いながら維持することに決めたのだった。

深谷さんがかつて料理の修業をしたスペインのバスク地方サン・セバスチャンには、「ソシエダ・ガストロノミカ」と呼ばれる、その名前を冠した会員制

プロ仕様の調理器具が揃う厨房。「はこだてソシエダ」の会員たちが食材を持ち寄り、自ら調理をして振る舞っている。

とはいえ、この貴重な建物を放っておくことはできない。清水さんや深谷さんが「再生」を決めるまで時間はからなかった。建物の購入も検討したが、最終的に所有者と清水さんの会社が賃貸契約を結ぶことに。「修繕費2千万円はすべて私たちが負担したけれど、所有者は安い賃料で貸してくれた。本当はこの建物を残したいと思っていたのでは」と清水さんは言う。

函館の西部地区で生まれ育ち、身近にあった古い建物に関心を持って、古い教会を店舗として再生した自身の経験から、旧松橋商店も建物を生かしてお金を生むような場所になれば、と清水さんは考えた。清水さんにとって古い建物を守ることとは、まちづくりという発想とは違う。事業として継続できるように活用し保存していくことであり、商売人の視点から古い建物を捉えているのである。

まちのデザイン、
くらしのデザイン

の美食クラブが数多くあった。集合住宅で暮らすバスク人の男たちの息抜きの場。古い建物を生かし、プロ仕様の調理器具で男たちが料理を作って楽しむ。原則として女性には厨房への立ち入りが禁止され、正会員は男のみ。このソシエダの話を伝えていた知人から「ソシエダとして使ってみたら？」と薦められたことがきっかけとなって、旧松橋商店を生かす一つの方法として、深谷さんは日本初の「はこだてソシエダ」を提唱したのであった。ソシエダはスペイン語でソーシャル（社会）を意味し、その理念の根幹には「何カ月も航海をして鰯や鯨を追いかけたバスク人にとって、ソシエダは『一つの船』という考えがある」（深谷さん）。政治や経済の話はしない。酒を飲んでもいいが紳士的に自己申告する。首都マドリッドから抑圧されて、「見返してやるう」と意気込むバスク地方の人びとの気概の塊なのだ。

そうして立ち上がった「はこだてソシエダ」は、男性25人ほどのメンバー限定の組織だ。入会料10万円と月会費1万円を建物の修繕費の返済に充て、料理をして語らいを楽しむ。メンバー同士は肩書では呼び合わず、あくまで名前と呼ぶ。日常社会で所属する組織における位置関係を取り払い、誰もがフラットに関わるからこそ、新しい利活用のアイデアが生まれ、具現化できるという哲学だ。

再生されて「港の庵」と名付けられた建物は今年で4年目を迎え、年間120日以上の利用がある。コンサートや落語の寄席、男性によるファッションショー、バザーなどを会員自らが主催している。映画の撮影でも使われた。観光資源というより、自分たちが楽しんで使いたいというのが、はこだてソシエダの考え。古い建物の使い方の形は一つではないことを示すモデルとなっている。

フラットな組織で

誰もが参加できるフラットな組織で、地域資源を活用する。こうした事例が増えていけば、お金を掛けられなくても、小さな規模でも、函館の財産である町並みの保存にできることはあるかもしれない。「事例をコツコツ積み上げて、こんなこともできるというのを見せていくことが大切」と富樫さんは語る。

「こんな使い方があると知ってもらえれば、後に続く人が出てくるかもしれない」と深谷さんは期待する。

つい外へ求めがちになってしまいう意識を足元へ向け、すぐそばにあるかもしれない価値に気づくこと。そこから、持続可能な街のデザインが生まれるのだろう。

まちのデザイン、

くらしのデザイン



岡本誠さん ● 公立はこだて未来大学教授 に聞く

「参加型デザイン」が拓く可能性

聞き手・中川大介（人と水研究会）

――函館市西部地区を舞台にした食べ・飲み歩きイベント「函館西部地区バル街」が、2017年度グッドデザイン賞の「ベスト100」と特別賞（地域づくり）を受けました。岡本さんはこの賞の審査員として、バル街を受賞候補に推薦したそうですね。

岡本 グッドデザイン賞は輸出製品の品質を保証する目的で1957年に通商産業省（現経済産業省）が創設し、当初は確かに自動車などの工業製品、つまり「モノ」が主な受賞対象でした。やがてソフトウェアやサービスが対象に加わり、近年はイベントや社会的な仕組みづくりなどの活動、つまり「コト」の

デザインも対象になっていきます。その活動の社会的な意義や、活動をつくりあげるプロセスを総合的に評価する方向へと幅を広げているのです。

バル街は西部地区の町並みと、お酒と食べ物と、人との出会いを楽しむイベントです。これは「コトのデザイン」の好例であろうと僕は考えて、グッドデザイン賞に推薦しました。

「モノ」から「コト」へ

――製品ではないイベントがデザインの賞を受けるとは、意外な感じがしました。

岡本 バル街は実行委員会代表の深谷宏治さんをはじめ市民が

発案して、特定の企業や行政の補助に頼らずに、市民の力で運営しているイベントです。深谷さんたちが2004年の世界料理学会の前夜祭として開いたのが始まりですが、原点は「自分たちの町の魅力や豊かさを、多くの人と共有したい」という思いです。大上段に振りかぶった町おこしイベントでも、中央から押しつけられた「地域創生」の行事でもありません。

そこでは、運営に関わる実行委員やお店、住民らが「自分たちのできること」を持ち寄り、工夫しながら、地元のすてきな町並みの中で「特別な一夜」を楽しんでいます。多くの市民が関わって、息長く続ける。まさ

に、自分たちの生活を豊かにするという「コトのデザイン」を市民自身の手でおこなっているのです。

――「デザイン」というもののとらえ方が変わってきているのですね。

岡本 僕の専門は情報デザインですが、コトのデザインに光を当てたいと考えています。デザインは従来、モノ中心に考えられてきました。企業や行政組織などが作る工業製品や建物、道路といったモノが人の暮らしを支え、豊かにするという考え方の下で、暮らしをより快適にするために製品デザインの改良が追求されてきたのです。

けれど、生活を豊かにするた

まちのデザイン、

くらしのデザイン

めに必要なのはモノだけではない、コトが大切だという考え方が2000年代から広まってきました。人は何かのコトに加わることを通して、幸せや豊かさを実感するのだ、と。モノに支えられる暮らしは、それを提供する側（企業など）と受け手（消費者）の関係が固定化しますが、コトのデザインは違う。主役は市民であり、提供する側と受け手が時に入れ替わり、等しく参加する形になる。

コトは変化していく

——確かに、モノのデザインとは違いそうですね。

岡本 そもそもコトとは何でしょうか。僕たちは哲学者を呼んで勉強会も開きましたが、適切な英訳がないのです。客観的にとらえるのが難しく、「思いの集合体」と言ってもいいでしょう。人の考えが変わるよう

に常に変化します。コトとは変化し、動いていくものですので、コトのデザインはモノのデザインとは明らかに違います。

僕は、モノを作るときとは違うところに着目しなくては、と考えました。それが「参加型デザイン」という考え方です。例えば工場を造るとき、デザイナーだけでなく設備などのデザインを考えるのではなく、その工場の人たちの中に入って、一緒に「どうすれば気持ちよく働けるのか」を考えるのです。それによって「工場で快適に働く」というコトのデザインが可能になる。しかし、「一緒に」デザインすることが難しい。現場の人は現場を一番良く知っていますが、暗黙のルールや前提は問いかけても語ってもらうことは難しい。相互に学びあえる環境を作ることが肝だと思っています。

——「参加型デザイン」とは耳慣れない言葉です。具体例で説

しています。最初は単に使ってみて感想を言うだけだった障がい者も、体験と対話を重ねることで「こんなことができたらい」と積極的に発言するようになる。「夢見ていること」がモノ作りへの参加を通して明確化され、具現化へ向かうのです。

同じようなことが、同じ公立はこだて未来大の和田雅昭教授らと一緒に進めている「マリンIT」というIT（情報技術）を漁業の現場で活用して効率の向上や適切な資源管理につなげるプロジェクトでも起きています。国際協力機構（JICA）の事業で、インドネシアでこの技術の応用を試みているのですが、現地の漁師に積極的に参加してもらうために「あなたの一日の動き」や「あなたの夢」について絵を描いてもらう。すると、屋根付きの船や自動車、住宅、聖地メッカへの巡礼といった心の深層にある願望が可視化

される。「じゃあそれを手に入れるためにこうしましょう」と話を進めることができるんです。

自分たちでデザインを

——「言語化」とは違う方法で「思い」を引き出し、巻き込むのですね。

岡本 人間一人の知恵なんてたいたもんじゃない。皆の知恵を集めてコトをデザインし、自分たちの手でよりよく変化させればいいものが生まれる。教育や福祉、医療などの社会サービスも、地域の祭りも、同じように自分たちの手でデザインすべきものではないでしょうか。それが、いつの間にか「与えられるもの」になってしまっているのが現代の社会です。

ITはどんどん進化して身近になり、活用すれば自分たちの手でつくりあげられることはまだあるように思えます。足元を

見て、暮らしを振り返ることから始めたいですね。

——足元からスタートする。バル街も同じかもしれません。

岡本 そうです。バル街も関わる人たちの思いはさまざまです。実行委員、お店の人、市内から来る人、市外から来る人。いろんな人たちが関われるようにして、しかも最初から完璧にやろうと思ったりせず、工夫しながら改良を重ねる。互いに学び合い、成長する。まさに「参加型デザイン」です。「港の庵」で深谷さんらが取り組んでいることも底流は同じでしょう。

函館には、東京とは違う時間の流れ、暮らしの豊かさや幸せがあるように思います。いかに速く効率的に、という価値観とは違う、函館らしいインクルーシブ（人びとを包み込む）な価値観を大切にしていた方がいいんじゃないかと思っています。



明してもらえますか。

岡本 僕は視覚障がい者や学生たちと、目という感覚器官に代わるものをデザインする「指で見る」プロジェクトに取り組んでいます。赤外線センサーで物の形や対象物との距離を感じ、指に触れる微妙なレバーの動きを通して障がい者に伝える小型カメラみたいな器具を開発

まちのデザイン、

くらしのデザイン



おかもと・まこと 1956年山口県生まれ。筑波大学大学院芸術学研究科修士課程修了。電機大手の富士通（東京）で製品デザインを約20年間担当。2000年から公立はこだて未来大教授。専門は情報デザイン。函館市都市景観審議会会長。

開港5都市景観まちづくり会議2018函館大会

テーマ「未来につなぐまちづくり」今、立ち止まって考える」

天然の良港、異国情緒豊かな町並み、魅力ある坂道景観。これらは函館を表現する常とう句

だが、同じキーワードで表現される都市が他にもあることはご存じだろうか。安政の開国で約

持ち回りで会議が開かれてきた。今年は9月に第24回目の会議がここの函館で開催される。

「会議」と名付けられているが、アカデミックで真剣な議論の一方、酒と肴を手に親睦を深める3日間だ。もちろん市民の参加も歓迎している。

まちは過去からの歴史があり、現在まで繋がっている。そこには大小さまざまな「コト」がある。地域によって、人によって、その影響は多様であり、流れはたゆまない。大会期間中、立ち止まって、まちについて考えてみるのも良いのではないだろうか。



160年前、函館（当時は箱館）と同時期に開港を果たした横浜、神戸、長崎、新潟である。この5都市は、同じ魅力を持つている一方で、景観の維持やまちづくりの持続性など、共通の悩みも有している。そんななか1993年に神戸市の呼びかけにより、「開港5都市景観まちづくり会議」が始まり、年に1度、各都市

現在、市内で景観やまちづくりに関する活動を行っている29の市民団体などで構成する実行委員会が準備作業を進めている。実行委員長で「函館の歴史的風土を守る会」の佐々木馨会長は、「多くの市民団体が集まって、これまで以上の充実した会議や分科会になるよう熱心に企画を練っています。函館での景観まちづくりが、来函する方々だけでなく多くの市民にも伝われば幸いです」と抱負を語る。

開港5都市景観まちづくり会議2018
函館大会は、9月13日、函館市民
館や市地域交流まちづくりセンターなど
を会場に開催予定。市民参加も受けける。
詳しくは、
大会事務局
（函館市都市建設部まちづくり景観課
0138-2113357）へ。

まちのデザイン、
くらしのデザイン

函館市の景観行政検証報告書から

市民の声をとらえる

魅力的なまちを創り出す上で、都市景観のデザインの大切さは言うまでもない。市民と行政が連携しながら地域にふさわしいデザインを探るべきものであり、行政には市民の声をとらえながら政策を見直していく姿勢が求められる。

函館市は1988年、西部地区を対象に「西部地区歴史的景観条例」を施行し、西部地区の歴史的な町並みの保全、整備を進めてきた。95年には景観に対する意識の高まりを受けて、市内全域を対象とした「都市景観条例」へと移行した。

西部地区歴史的景観条例の制定から30年の節目を迎え、市は2018年、これまで取り組ん

できた景観行政の検証と課題を「景観行政検証報告書」としてまとめた。この報告書から、函館の景観行政の現状と課題を探ってみよう。

市は2016年度に「景観と暮らしに関する市民アンケート調査」を実施した。無作為に選んだ18歳以上の男女計1000人に調査票を送り、43・6%にあたる436人から回答を得て、データを1992年度に実施した「都市景観市民アンケート調査」と比べている。

「函館は美しいまちだと思いませんか」という質問に対して、「思う」は57・3%。92年度の47・8%から上昇しており、市民には「美しいまち」という実感が広がっているようだ。「函館の景観は以前（20年前）に比

べてどうなったと思いますか」という質問に、「良くなった」「少し良くなった」は計49・8%とほぼ半数だった。

また、「まち並みや景観で良いと思うところ」では、函館山からの眺望が85・7%、西部地区の歴史的な町並みが59・4%と際立っている。西部地区などで景観上重要な建築物の修理などを市が支援したことにより建物の保全が進んだことなどが評価されたとみられる。

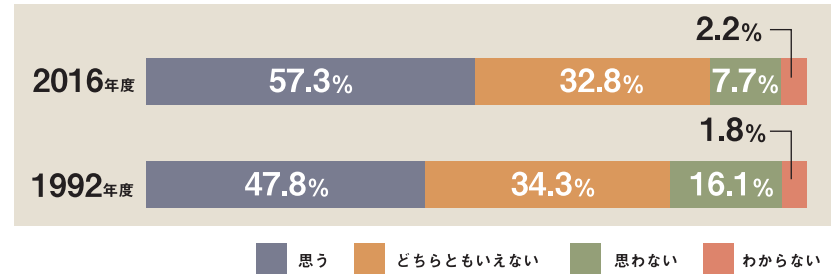
一方、「まち並みや景観を積極的に保全したり整備をした方がよいところ」では、函館駅前や大門地区周辺が51・4%で最も多く、西部地区が40・3%で続いた。空き家、空き地が増えていることや、北海道新幹線の開業を機に景観改善が課題になっている実態が浮かび上がる。

西部地区以外にも目を

西部地区の景観を整備する上での政策的な課題の一つが、歴史的建造物に対して市が出している補助金のあり方だ。現状は建物の規模にかかわらず上限額は一定だが、まちづくり景観課の浜谷内宏史主査は「建物の構造や規模に応じた補助制度にするなど検討していきます。また建物の状態を調べ、向こう何年間で維持管理がどれくらいかかるかなどのデータを集めています。補助制度がよりよいものになるよう生かしていければ」と話す。

一方、駅前・大門地区については「景観を作るための新たな区域指定なども考えられます。西部地区以外にも目を向ける時

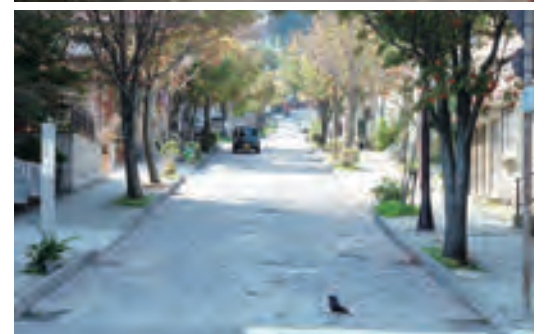
あなたは函館のまちを美しいと思いますか？



り組みが必要になってくる。
市はこのほか、歴史的建造物の保全にあたる人材を育てるための講座の開催や、景観意識の啓発のためにワークショップやイベントを通じて市民参加を促す考えだ。浜谷内さんは「都市景観審議会や景観整備機構、教育機関などと連携しながら市民と共に、将来の景観ビジョンをつくっていききたい」と語る。

「視点場」を整備

市が今後の重要な事業の一つに挙げるのが「視点場の整備」だ。函館には「景観資源」が豊富だが、ビュースポット（視点場）が未整備になっている場合が多いという。「フェンスや樹木などの障害物があり見通しが悪い」「近くに駐車場や落ち着いて座れる場所がない」といった状況で、市は、そこに手を加えれば撮影スポットや市民の憩いの場になると判断。優先的に整備すべき



昭和60年代の大三坂（写真上）と現在の大三坂（同下）。以前はアスファルト舗装で違法駐車も常態化していたが、石畳と街路樹などの整備により、エキゾチックな坂道として「日本の道100選」にも選定された。

「視点場」を選び、電線の撤去や石畳の整備、街路灯やベンチの設置などを行う考えだ。

まずは2、3カ所について来年度、国の補助金も活用して着手し、今後、整備箇所を増やすことも検討するという。市まちづくり景観課の松橋亨主査は「実際に歩きながら、整備すれ

ば穴場になるような視点場をみつけていきたい」と準備を進めている。

◆ 特集 ◆
まちのデザイン、
くらしのデザイン

街に関する一考察



連載／第2回

— 長谷山裕一

「自分たち事」として考えてみる。

印をつける事（design）がデザイン（design）の語源だと言われている。現代では、単なる表面上の意匠を飾ることだけではなく、問題解決のための設計や形態に表れないものの方針策定なども、広義な意味でデザインに含まれるという。無形なものであっても、その考え方に印をつけるプロセス自体が、デザインと言えるのだろう。

ンに相互に影響を与えていると考えることもできる。

日本における情報デザインのバイオニアで2013年に急逝した渡辺保史氏は著書の中で、自分にとってごく身近で狭いプライベートな「自分事」でもなく、自分とは全く無関係な「自分たち事」だとして、ハコダテ・スローマッププロジェクト（2004年2月）オープニングの様子。写真は渡辺氏。



係なものとして切り離された「他人事」でもない領域が、個人と社会のあいだにある「自分たち事」だとして、新しい関係や企てをつくり上げていくことが重要だとしている。

ハコダテ・スローマップ、ハコダテ・スミカプロジェクト、ハコダテデジタル、函館国際科学祭。これらは、渡辺氏が生まれ育った函館で深く関わったプロジェクトの一部である。私自身も、時には外から時には内から眺めながら、人々との繋がりによって、生み出されるコトのデザインを目の当たりにした。そこで生まれた手法や知見は「自分たち事」を考える上で大きな財産となっている。

地方都市では、人口減少などの社会環境の変化による

り、自分事でも他人事でもない様々なコトが起きている。その対応によって私達の暮らしは、好むと好まざるとも大きく変わっていく。自分とは関係ないと言って目を背け、興味が無いからとして関わらず、干渉されたくないと言って耳を閉ざす。では済まないことも予想される。

私達は、街で起こることを「自分たち事」として捉え、新しい関係をつくり、新しく生まれるコトを考え、丁寧に印をつけていく行為こそが、街のデザインなのかもしれない。そのために何が出来るか、今日も考えるのである。

※渡辺保史氏の著書「Designing Ourself: 自分たち事」のデザインはクラウドファンディングにより2018年3月に発行された。新たに購入は出来ないが、函館市中央図書館に寄贈されているので、ぜひ手にとって欲しい。

PROFILE

函館市生まれ。建設会社を退職後、地方公共団体に入館。まちづくりや市民活動支援、交通政策などに従事。



防波堤から見えるもの

中川大介／人と水研究会

この5月に他界した絵本作家・児童文化研究家のかこさん（加古里子）さんに、「土木歴史絵本」シリーズ（瑞雲舎）がある。かこさんは東京大学で化学を学んだ技術者である。「だるまちゃん」シリーズをはじめ子どもたちの素朴な心の動きをユーモラスに描いた作品とともに、「かわ」「宇宙」など自然と人のかかわりを考えさせる科学絵本を残した。わたしたちの社会を支える科学や技術を、子どもたちにわかりやすく伝えたいという思いにあふれている。

「土木歴史絵本」の第4巻「土木技術の自立をきずいた指導者たち」（2004年）で取り上げている人物の1人に、函館と

ゆかり浅からぬ広井勇（ひろい・いさみ、1862～1928）がいる。内村鑑三、新渡戸稲造、宮部金吾らとともに札幌農学校（現北海道大学）の2期生。米国やドイツで土木工学を学び、母校や東京帝大で教えた日本近代土木の先駆者である。

真夜中も現場へ

北海道庁の土木課長も務めた広井の仕事の道内における白眉は、1897年（明治30年）に始まった小樽港の築港工事である。季節風や低気圧が襲来すれば激浪寄せる小樽港に、延長1・3キロのコンクリートブロック積み防波堤を設ける難工

事であった。

日本人の手による初めての綿密な港湾調査と試験、計画、設計を経て、厳しい自然相手の土木工事にのぞんだ広井の姿を、かこさんはこの絵本でこう描写している。

「広井は、防波堤の工事中も完成後も暴風雨がおそうと真夜中でも

函館漁港の船入瀬防波堤の傍らに立つ布村重樹さん。弁天台場の石材が積みまわっていた胸壁の下部にコンクリートの基礎が見える。



PROFILE
岩手県生まれ。新聞記者。カヌーや漂流での釣り好きが高じて人の暮らしと水とのかわりに興味をもち、仲間と「人と水研究会」をつくって、水辺歩きを続けている。

現場に走り、じっと見守っていたといえます。また、朝早く現場に出てひとりセメントを配合している広井のすがたに、作業にかかわる人たちは、いくたびも胸を打たれたということです

「じっと見守っていた」広井の姿に、日本の伝統的な治水技術で言われる「見試し（見て試し、結果を見てまた試す）」に通じる姿勢が感じ取れる。コンクリートのなかった近代以前の土木は、「自然を制御する」というより「自然と折り合う」ための技術を追求した。荒ぶる自然をかかなりの程度、制御しようという確信を持てなければ、人は謙虚に自然と向き合うよりない。近代の始まりの時代に生きた広井には、こうした哲学が生きていたように思う。

この小樽港築港に1年先駆けて起工したのが函館港の改良工事である。広井はこれを指揮・監督し、続いて1910年（明

治43年）に始まった函館港の築港工事の設計も担当した。この中で1899年（明治32年）に完成した函館漁港（函館市入舟町）の船入瀬（ふないりま）防波堤は、築造後1世紀を経て原型復旧工事がなされたが、いまなお西風による波浪が港内に入るのを防ぐ役割を果たしている。

この防波堤はコンクリートブロックの基礎を沈め、幕末に構築された弁天台場の解体に伴って生じた石材を積み上げていた。当時の港湾工事において、日本人が作ったコンクリートの使用は確立された技術ではなかった。先進技術を学んだ広井でさえ、おそらくは心細さや不安を乗り越えながらの工事だったであろう。

近代化を担う技術

濶口をはさんで北側104メートル、南側10メートル（竣工時は54メートル）。船入瀬防

波堤に立てば、寄せては返す波が洗う基礎部分のコンクリートブロックを見ることができ。函館に残るコンクリート建造物の価値の再発見を進めるグループ「函館湾岸価値創造プロジェクト」の代表であり、函館で建設コンサルタント会社を営む布村重樹さん（57）によれば、この防波堤の意義は日本の港湾で用いるコンクリートの品質管理の基礎を築いた点にある。

「コンクリートを港湾に用いた場合の強度変化についてデータの蓄積がない中、広井はコンクリート利用のリスクを軽減する手法として石積みを用いたのではないだろうか。この函館港と、続く小樽港の工事を通じて、コンクリートの強度の目標値や評価方法が確立し、日本の港湾土木の基礎がつけられていったと思うのです」

河川堤防、ダム、道路、橋。日本で作られるコンクリートは多雨多湿の日本の自然に耐えて

産業や生活を支えるインフラを造り、近代化を担う主要な技術となった。その出発点の地の一つが函館であり、そこには謙虚さと誠実さを備えた一人の技術者の姿がある。

ただ、得るものがあれば、それによって失うものがあるのが世の常である。コンクリートの技術の進歩は、技術者に「造ったもの」を注意深く観察する意識を薄れさせた。住民たちは専門技術を要する土木の世界から遠ざかり、やがて「人が造るものは決して盤石ではない」ということをあまり考えなくなったのであった。

謙虚さと誠実さと

東日本大震災の津波被災地で、わたしは無残に損壊した防波堤・防潮堤などの港湾施設を無数に見て来た。故郷の岩手県釜石市では高さ10メートルもある漁港の防潮堤が倒れ、この連

載の第一話で紹介した世界最大級の海中防波堤さえ壊れた。水の力のすさまじさを見せつけられてきた。

一方で、「防波堤や防潮堤があるから、津波が来ても大丈夫

東日本大震災の津波で損壊した岩手県釜石市の漁港にある防潮堤。釜石ではこのほかに湾口にある海中防波堤も壊れた。2011年6月



だと思っていた」という被災者の話もよく聞いた。コンクリートの防波堤・防潮堤が完成すると、住宅地が海沿いに広がって行く。川べりで、がけ地で、コンクリートの護岸や堤防、擁壁などができた後、宅地がそのそばまで広がるのと同じ光景である。

してきたが。浸水が予測されるエリアでは、それに備えて家の土台を高くしたり、避難の経路や手順を決めておいたり、住民同士で出水が予測される箇所に土のうを積み準備をしておくなどの水防活動が必要になる。

たのではない。備えとして「自助共助」の方法をも念頭に置いていたのではないかと思う。かこさとしさんの「土木技術の自立をきずいた指導者たち」によれば、広井は晩年、こう語っている。

その備えが危うい。「自然の現象に想定外は起こりうる」という意識が、どれだけ共有されているだろう。技術の高度化に伴い、港湾や治水など土木工事のほとんどが「行政が公共事業として担うもの」となったが、

「もし工学がただ人生をいそがしいものにするのなら何の意味もない。学問によって数日かかるとことを数時間に縮め、一日の仕事を一時間にとどめ、人が静かに人生を思う余裕を与えるものでなければならぬ」

しかし現代において、土木インフラを造る際に一定の「想定」が必要なのは事実である。河川の治水では「確率年」という言い方をする。「●年に一度」の確率で起きると見込まれる洪水に耐えられる規模の堤防を設計する、といった具合だ。その想定を超す洪水があれば、水は堤防を乗り越えて田畑や宅地に迫る可能性がある（戦後の日本の治水は水が堤防を超えることを

行政機関や技術者は建造物にこまやかに注意を払い、想定を超える事態が起こりうるリスクを説明できているだろうか。

学問や技術の進歩によって多くの時間的な「余裕」を得たわたしたちは、その時間を「静かに人生を思う」ことに使っているだろうか。人間を生かせしめている自然と、いかにかわって生きていくべきか。土木の進歩に人生をささげた広井の言葉をかみしめながら、潮風吹き来る船入瀬防波堤の上で考えてみたい。

「悪」としてハード整備に邁進

広井の時代には、そうした「想定」ができるほど十分な観測データがなかった。だからこそ、技術者は自然現象や構造物の変化に敏感に、謙虚にならざるを得なかった。おそらくは住民も、コンクリート構造物を100パーセント信頼してはいなかつ

たい。

昔の子ども、
今どきの子ども



第十話

道徳

庄司 証／函館圏フリースクールすまいる・代表

学校教育における「道徳」ほど、世代間ギャップがあるものはないかもしれない。

戦前の教育はいわゆる「修身」だったし、戦後しばらくは学校生活全体を道徳的なものとして捉えた。授業で道徳を扱う「道徳の時間」が設定されたのは1958年。偉人などの物語を読んだり、「さわやか3組」や「ざわさわ森のがんこちゃん」といったNHK教育（Eテレ）を視聴したりした記憶がある方は少なくないだろう。あるいは、学校行事の準備ばかりだったという方もいるかもしれない。

そもそも「道徳」とは人格形成における道徳性（行動様式・

生活態度・価値信念体系）を育むことを目的とされている。もちろん普遍的な価値観もあるが、時代の流れとともに変化することもたくさんある。例えば、

女学校用修身教科書には「夫にかしづくべきこと」という項目があった。かつて女子には良妻賢母であることが求められ、同じように男子には「男らしさ」が求められた。そんな時代の教育を受けた人から見ると、今の若い男性（あるいは女性）は全く道徳的ではない、と映っているのかもしれない。しかし、今や身体的男女差だけでなく、多様な性の在り方を考える時代になってきている。

そんな「道徳」がこの4月か



ら教科になった。「特別の教科」としての「道徳科」になったのである。確実に「道徳」の授業をすることが求められるようになり、指定の教科書をメインに指導し、「評価」をしなければならなくなった。記述式になるようだが、教員が子どもの道徳心をどう判断するかは、とても難しい課題だろうと思う。また、子どもにとっても、自分が道徳的かどうか、自覚することになるのだろうか。

いずれにしても、教科化の意図は、画一的な価値観を身に付けるのではなく、これからの社会を担う存在として多様性を認め合う姿勢を身に付けることだ。自らが主体的に生きることができるよう、そして一つの正しさを求めるのではなく、様々な価値観を尊重し合える社会につながる道徳。ぜひ、そんな教科になってほしいものだ。

PROFILE

七飯町出身。北海道教育大学大学院修了。在学中から「チーフキリスト教学園」の活動に参加し、2012年「函館圏フリースクールすまいる」設立。不登校や若者の居場所支援などを行っている。

WU-BOOK

●ウー・ブックの書棚から。

夏井俊介／ウー・ブック店主



1920年代のロシア絵本は世界でも評価が高く、1冊10万円程度で取引されている。作りはいたって簡素なもので、ハードカバーでなくパンフレットのようにただホチキスで留めたものがほとんどである。大体の発行部数は5000～10000部ほど。けっして少ない数ではないが、絵本はその性質上、子どもたちが遊びながら学んでいくもので、落書きや破れなどがなく綺麗な状態のものは、おそらく100部も残っていない。美術館や大学など施設が保管しているケースが多い。本書は、その中でもとびきりのクオリティ。マルシャークとレーベジェフの黄金コンビによるアルファベット本。残念ながら写真は本に掲載されていたもので、本物は海外の有名オークションで300万円で落札されている。この先もしも私がこの本を所有することがあれば、ただちに復刻版として出版し、手頃な価格でこの優れた絵本を世に広めたい。



PROFILE

群馬県生まれ函館市育ち。夏井珈琲勤務の傍ら、古書販売や本に関わるさまざまなイベントを企画する WU-BOOK を運営。古今東西の素敵な本を発掘して紹介している。



監督・脚本／三谷幸喜
美術／種田陽平
出演／佐藤浩市、妻夫木聡、深津絵里、綾瀬はるか、西田敏行

本作は、暗黒界のボスの愛人に出した男が、命を助けてもらう代償に伝説の殺し屋を探し出すクライム・コメディ。映画監督のふりをした無名の俳優を幻の殺し屋に仕立て上げようとする、しがないギャングの苦肉の策を描いている。撮影と思ひ込み殺し屋に成り切る俳優に佐藤浩市、その俳優をだます小ずるい若者に妻夫木聡。うそと思ひ込みが巻き

起こす感動と爆笑が交互に訪れる、巧みな脚本が光ります。映画は冒頭から、舞台となる港町「守加護（すかご）」のセットから始まりませ。東宝の大ステージにまるごと作ったという「守加護」の町の大セットは「日本映画史上最大級のスタジオセット」と言われています。担当したのは、日本を代表する美術監督の1人、種田陽平。まるで往年のハリウッド映画を彷彿とさせる華やかな

PROFILE

滝川市出身。函館における数多くの文化事業や施設・イベントの企画運営に携わる。現在は公財「函館市文化・スポーツ振興財団」。

雰囲気を感じ出しています。三谷作品の他にも、クエンティン・タランティーノ監督『キル・ビル』、是枝裕和監督『空気人形』など多数。初期の岩井俊二監督の『スワロウテイル』では、近未来の架空都市・円都（イェンタウン）で、その世界観に圧倒的な説得力を与えています。そして、函館でオールロケした辻仁成監督の『ほとけ』。穴子の鉄工場の中に作った巨大仏像は圧巻でした。

「ザ・マジックアワー」
（2008年）
シネマで
コーヒープレイク
米田哲平
／函館港イルミネーション映画祭実行委員長

KOMIYA'S CREATION DIARY

小宮伸二／美術家

5月31日、夕方からの雨。

花瓶にリメイクした電球が窓辺に揺れている。今年の初めに仕事場を整理していたら大量の電球が出てきた。水のインсталレーションなど電球を使う作品も多く、切れた電球をいつか何かに使おうと今まで捨てられずにいたものだ。こ…これはもうどうにかしなければ、と頭を抱え、まずはかねてより作りたかったアルコールランプに仕立ててみた。コンクリートベースから延びるワイヤースタンドに本体が留められる。芯キャップなど各種必要グッズも作り、満足する仕上がりとなった。たくさん作ったが電球はまだまだある。で、次に花瓶にしてみる。これもコンクリートベースの据え置き型、その他に吊り下げタイプのものも作った。

僕はこれらをアートとは呼ばない、デザイン的、工芸的なものだと思っている。なのでこういったもので、なおかつ名前を出す必要がある場合は「RAUM STUDIO」もしくはこっそりとカタカナでコミヤシンジと表記している。しかし僕は気付いてしまった。球体に水やアルコールを入れ

るとレンズ効果で光を集める。そしてその中には逆さまの景色が映り込む。まさにこれは僕の作品シリーズでもあるカメラ・オブスクラではないか。逆さの世界を閉じ込め、アートの装いを纏い始めたものを前にして、電球オブスクラとでも名付けようか、どうしたものか、と僕はいま悩んでいる。

※本文中のものはすべてみかづき工房（弥生町）0138-87-0787にて販売中。

PROFILE

函館市出身。インсталレーションをおもな表現手段とした現代アート作家。海外でもオーストリアを拠点とした東欧各地やアメリカで個展開催、シンポジウムなどにも数多く参加。

PROFILE

美大卒業後、フードスタイリストの道へ。女性誌、広告、等の経験を経て、32歳の時、故郷の乙部町へUターン。現在は函館市内を中心にイベント出店や料理教室などを行う。

近藤さんちの
今日のお昼ごはん



近藤 緑／フードスタイリスト

【カフェのまかないごはん】

「まかない付き」って、アルバイト選びの魅力的な条件の一つですが、その実情は、いかにコストをかけずに手際よく、疲れた従業員達の身体も思いやって…と料理人にとっては意外とハードルの高い料理です。

だからこそ、まかない休憩はお店にとって大切なコミュニケーションの時間でもあるんです。

お手伝いしている時任町の菜園カフェのまかないごはんは切れ端食材をたっぷり混ぜ込んだリゾット。切れ端と言っても、市内近郊のオーガニック農家やカフェ併設の菜園で採れた力強い味わいの野菜と大沼あかり農場さんの豚肉。卵やチーズ、調味料一つ一つもじっくり吟味されたものを使っています。疲れた体にじんわり染み入る美味しさ、深呼吸するようにいただきました。



には家族で足を運んだ。ソースが飛び跳ね、ジュージュと音をたてて熱い鉄板で運ばれてくるレアぎみのハンバーグ。ナイフで切ると肉汁があふれ出した。牛肉のしっかりとした食感とさっぱりとしたソースが絶妙に絡み合ううまさ。私のハンバーグバロメーターは、この味が基準になった。

どのお店も今は閉店してしまっているの思い出でしか味わうことができないのが残念だ。1859年(安政6年)の開港にともない、欧米の食文化がいち早く流入した函館。見渡してみるとたしかにハンバーグがおいしいレストランやハンバーグ専門店、ハンバーガーの店が目立つ。自分をはじめ、お気に入りの店のハンバーグ愛を熱く語ってくれる人も多い。ハンバーグが老若男女愛すべきメニューなのは間違いない。塩ラーメンのように、いつか、函館のハンバーグが注目を集める日がくるかもしれない。

PROFILE

函館市生まれ。地域情報紙記者。食への探求心が旺盛で、旅先で出会うソウルフードが楽しみ。最近は大沼湖畔のキャンプ場で大勢で囲む夕食が好き。

函館モノ語り。

「ハンバーグ」

押野友美
ライター

スがかかったハンバーグが絶品で、私はその店でハンバーグしか食べたことがない。そのくらい好きだったのだが、私がハンバーグを食べているそばで、店主と父が「海外には食用ネズミってというのがいるらしいぞ」と盛り上がっていたときは複雑な気持ちになった。

牛肉100パーセントのハンバーグが人気だった富岡町の店



「函館の人ってハンバーグ好きだよな」。飲食店事情について話していた時、知人が話題をふってきた。ハンバーグは店でも家でも食べることができる身近な洋食だ。函館に限ったことではないのでは…と思いつつ、ハンバーグについて考えた。

ハンバーグの起源は、13世紀に欧州に攻め込んだモンゴル系のタタール人が馬の生肉を細かくし、食べていた料理「タルタルステーキ」にあると言われている。時を経て、タルタルステーキはドイツのハンブルクで流行。それが米国などに伝わり、ハンバーグステーキ(ハンブルク風ステーキ)と呼ばれるようになったらしい。

私の記憶で一番古いハンバーグは、幼稚園の頃、当時、本町にあった小さなハンバーガーショップで食べたハンバーガーだ。お姉さんの顔も値段も味も忘れたが、注文をして、お金を払って、カウンターでハンバーガーを食べるという行為に満足感を感じ、小銭を握りしめてたびたび通っていた。

父親とよく一緒に行った大門の洋食レストランは、デミソー

店主の「函館バスの後部座席で正義を叫ぶ」⑩

中村ひでのり／本誌編集人

若い頃、2年半だけ会社勤めをしていたことがある。東京・中野区にあった社員50人ほどの「編集プロダクション」が僕の勤め先だった。入社後ほどなく、ほぼ毎日遅刻をするようになり(深夜まで残業をしていたという理由もあるが)、先輩には偉そうな口をきき、夏の暑い日は短パンで出勤し上司に驚かれたことも、という不良社員ぶりだった。給料日前はいつも金欠で、社長に前借りをし、仕事上ではえげつないことを平気で行うのに金の取り立てとなるとめったに金が取り立てとなるとめったに気が小さくなる彼(社長)を見透かして、いよいよとなるまで返さなかった。

今思えば、クビにならなかったのが不思議だが、その会社だって到底まともな労働環境ではなかった。残業手当もつかないのに、おおぜいの社員

が明け方まで原稿用紙と向き合っていた。早朝のオフィスには、男も女も関係なく、机の下に段ボールを敷いて仮眠をとる姿が毎日のようにあった。休日もほぼ出勤するので、たまの休みにはどうやって過ごそうかと戸惑っていたほどだ。見事なほどのブラック企業っぷりだが、大半が20代という社員たちは、会社に強要されているわけでも、社長に洗脳されているわけでもなくて、純粋に、もっと仕事の腕をあげたいと励んでいたように思う。僕も「給料をもらいながら学ばせてもらっている」毎日充実感を感じていたし、歳の近い同僚たちと、文化祭の準備でもしているような楽しさもあつた。

さて、こんな話をしたのは、昨今騒がれている「働き方改革」についてひと言言わせて

いた。ただ、前振り、ではなく、なんと今号の特集のタイトルにほんのちよっぴり絡んでくる、という意表をついた展開だ。

当時同じ部署に、10歳ほど歳上の「Yさん」という先輩がいた。僕は彼がなぜか苦手だった。で、さまざまなアドバイスをくれる彼に、反発ばかりしていたような気がする。

「デザインとは、形のないものに形を与えること。その際に余計なものがくつついていくと正しい輪郭が見えにくくなる」、「できるだけわかりやすく、できるだけシンプルに。簡単なことを格好をつけて難しく見せるな」等等だ。

やがて経験を重ねて、彼の言葉の意味が少しずつ理解できるようになり、仕事を上での大きな指針となった。今さらだがYさんに対しては謝罪と感謝の気持ちでいっぱい。どこかで元気でおられることを願う。

PROFILE

北斗市生まれ。本誌編集人の他、ビープス函館の制作にも携わる。リヴズ代表。

もっと知りたい、世界の音楽。

ふくだたくま

一般社団法人ワールズ・ミート・ジャパン

踊るオジサマ。演奏するオジサマ。合唱するオジサマ。こんな「オトナのステージ」を伝えたい。しかし、われらが芸術祭のポスターやパンフの表紙に採用されるのは、たいていフオークダンスを踊る女性たちの姿です。

壮年男子の太い眉毛、濃い鬚、見事な坊主頭。それが文化の多様性を表す気がする。これまでアコーディオンを持つイタリア人、縦笛を吹くリトアニア人、バイオリンを弾くオーストリア人などを登場させたことがありません。勝手な印象ながら、ロシアから来る舞踊団には必ず、寡黙なバンドマン、道化師、芸術監督など、毎回姿を変えて素敵なオジサマがいます。しかし、こうした写真を代わりに使ってみたものの、否定的な意見も肯定的な意見も聞こえてきません。

とっておきのオジサマたちは、南太平洋のニウエ島からやって来た、顔を黒く塗って一心不乱に踊

る伝統舞踊団「タウ・ファタ・ニウエ」。ほんとうはYouTubeで世に出したいのですが、2008年当時は「Mini.DV」という規格で映像を記録していたため、アップするにはまずテープを探るところから始めなければなりません。

最近ではスマホでも高画質の写真や映像が撮影できます。オジサマを求めている人は必ずいると信じているので、これからは隙間をぬって反対を押し切り(時には黙って)、オトナのステージを伝えたいと思います。

2017年の最新作、メキシコのオジサマ。訴求力はあると思うんだけど、媒体に選んでもらえる機会が少ないんだよね。写真/グレアトーン。



PROFILE

根室市出身。「はこだて国際民俗芸術祭」の制作を担当。といっても事務畑なので、音楽の知識より「安全管理」を優先させているとか。平和が一番。

一枚の葉書

西野鷹志／文・写真

東京・井の頭公園の満開の桜をテレビが流すたびに、思いだすことがある。公園の池のほとりの一軒の宿のまえを行ったり来たり、入るべきか入らざるべきか。まさにハムレットの心境であったな、と。

昭和16年11月、戦争の風雲急を告げる真珠湾攻撃の20日ほどまえ、東京府三鷹村牟礼で生まれた。よちよち歩きの僕をかわいがってくれた近所の宿屋のおばさんが今も健在のはず、函館から上京し学生暮らしを始めたころ、ぜひ訪ねろと親父が言った。

吉祥寺駅に近い井の頭公園のほとりから歩いて1分ほど、生まれた借家があった。小さな一軒家は、朽ちかけていたが親父がいう昔の姿をのこしていた。つぎに探しあてた、おばさんの宿屋は、さかさクラゲ^{ササゲ}、連れ込み宿に変身していたのだ。昼日中、意を決して裏木戸からそつと入り、函館の西野、西野たかしです、むかし父がお世話になったと挨拶したとたん、僕をまじまじと見つめるおばあちゃん、あらあ……あなた、あなた、たかしちゃん……。帰り際に下宿暮らしと知ってお菓子と日清のインスタントラーメンをどっさりと持たせてくれた。

昭和14年から5年ほど、太宰治は、三鷹下連雀に美知子夫人と新居をかまえ、その生涯でもっとも静かなときを過ごし創作にうちこんでいた。そのころの代表作『津軽』を手に津軽半島の太宰がたどった道々を巡ったことがある。乳母たけの姿を探しもとめて太宰は西海岸の漁村・小泊でやっと対面を果たす。この場面が好きで、僕は小泊に1泊したことがある。三鷹にすむ太宰と同じころ、ごく近所で同じ空気を吸っていたという思いから、年老いても未だ愛読の一冊だ。

親父は僕の生まれた三鷹村の名前から、鷹を拝借、さらに節操ある人は、窮しても道はずす金品は受け取らない

ことのとえ「鷹は飢えても穂をつまず」を辞書でひき、その心構えで人生を志せと、鷹志と名づけた。氣高い鷹になれとは今もって重たい名前だ。

東京遊学中、酒を飲む金が底をつき、「〇オクレ」と実家に電報を打った。親父から「鷹は飢えても穂をつまず」と速達の手紙に一行。



東京・千鳥ヶ淵 2007.4

PROFILE

西野鷹志(にしの・たかし) 東京生まれ、函館育ち。タウン誌・街で『ライカはゆく』を17年間連載、2012年・147回で終えた。すきなもの—フランスパンの皮、ブルゴーニュワイン、ライカM6。

「お客様と信頼の絆で結ばれて115年」



 株式会社 高木組

本 社／函館市東雲町19番13号 0138-22-1195(代)

札幌支店／札幌市中央区大通西14丁目1番地13 北日本南大通ビル2階 011-206-4516(代)

<http://www.takagigumi.jp>

「国際交流のつどいから40年」地域に生まれたもの、そして次に向かうもの」

1979年夏、16名の留学生在北海道七飯町の農家に2週間ホームステイをし、日本の農業や文化にふれる「国際交流のつどい」という取り組みが行われました。そうした取り組みは九州でも始まり、1981年には鹿児島県の「からいも交流」、1983年には佐賀「地球市民の会」が生まれました。やがて「留学生ホームステイ」は全国へと広がりを見せ、市民レベルの国際交流、国際理解に欠かせない事業となりました。

この草の根の活動を全国に先駆けてスタートさせた七飯町では、今夏、40回目の「国際交流のつどい」を迎えます。そこで、これまでの歩みを振り返り、この活動が地域に何を持たらし、そしてどこへ向かうのかを考えます。



第5回「国際交流のつどい」の様子

日時／2018年8月26日(日) 14:00～16:30
場所／大中山コモン(亀田郡七飯町大中山3丁目275番地2)
入場／無料 定員／100名
内容／「ホームステイが世界を変える」(基調講演)

パネルディスカッション

山川俊郎氏(一般財団法人 北海道国際交流センター 副代表理事)
留学生、ホストファミリー他
七飯男爵太鼓創作会

主催／一般財団法人 北海道国際交流センター

共催／七飯町、北海道国際交流センター七飯支部

連絡先／0138-22-0770

お問合せは下記まで



(一財)北海道国際交流センター(HIF)
040-0054 函館市元町14-1
TEL. 0138-22-0770 FAX. 0138-22-0660
E-mail: info@hif.or.jp

<http://www.hif.or.jp>

ECOLE DE BALLET MAYUMI

【エコールドバレエ・Mayumi】

生徒
募集中!



バレエだからこそ、得られるものがあります。

当スタジオは、主宰者のフランス留学、そして東京バレエ団・Kバレエカンパニーでのプロとしての豊富な経験を生かした、エレガントで質の高いクラシックバレエ・レッスンを提供いたします。プロフェッショナルを目指したいお子様にはもちろんですが、「挨拶で始まり、挨拶で終わる」レッスンを通して、綺麗な姿勢・礼儀作法・美しい所作・忍耐力・協調性などが身に付く「バレエ」は、習い事のひとつとしても自信を持っておすすめいたします。是非一度、体験レッスンにお越しください。



主宰・加藤真弓
Mayumi Kato

略歴

1995年/フランス国立リヨンコンセルヴァトワールに留学。
2000年/東京バレエ団入団。「白鳥の湖」「眠れる森の美女」「くるみ割り人形」ワシリーエフ版「ドンキホーテ」ベジャール作品・ギリシャの踊り、他に出演。
2005年/K・バレエカンパニー(芸術監督:熊川哲也)に移籍し、「白鳥の湖」「眠れる森の美女」「くるみ割り人形」全国ツアーに参加。
2011年/エコールドバレエ・Mayumiを開設。
2013年/コープさっぽろいわ文化教室・講師。
2013年/第1回発表会「ノエル・バレエコンサート」。
2015年/第2回発表会「フランスに咲く美しい花々」。「コッペリア第3幕」(函館市芸術ホール)
2016年/第2回発表会「森のファンタジー」。「バレエ・コンサート」。
2017年/アトリエ・ヨシノ20周年記念公園「Iwaki ballet company」ドン・キホーテ全幕に出演。

【エコールドバレエ・Mayumi/第4回発表会】

Sleeping Beauty

バレエ教室「エコールドバレエ・Mayumi」の4回目になる発表会が行われます。今年も東京バレエ団からプリンシパルダンサーの柄本弾さんをゲストに迎えて、発表会のフィナーレを飾ります。

日時:2018年7月15日(日)
18:00~(開場17:30)
場所:函館市芸術ホール(大ホール)
チケット:前売2,000円、当日2,500円
問合せ:090-3115-7018



【エコールドバレエ・Mayumi】

〒040-0073 北海道函館市宮前町 6-12-3F TEL. 090-3115-7018

連絡先 ecole.de.ballet.mayumi@gmail.com <https://www.ecole-de-ballet-mayumi.com/>

※コープさっぽろ石川教室もあります。



函館ベイエリアへ行こう。

旅の楽しみといえばその土地の名所巡りと、その土地ならではのお食事やショッピングを楽しむ事。函館ベイエリアには心に残るお食事やお買い物を楽しめるスポットがたくさんあります。

マルカツグループ

勝 魚長食品
www.hakodate-factory.com

海鮮中場
HAKODATE FACTORY
HAKODATE FISH MARKET

はこだて海鮮市場 本店
函館市豊川町 12-12
TEL 0138-22-5656

HAKODATE BEER

はこだてビール
函館市大手町 5-22
TEL 0138-23-9696

函館 おおつ水産

回転寿司 函館 まるかつ水産 本店
函館市豊川町 12-10
TEL 0138-22-9696

明治館

はこだて明治館
函館市豊川町 11-17
TEL 0138-27-7070

激動の幕末、近代日本誕生の神き—特別史跡五稜郭



ペリー来航によって動き出した日本の新時代。開港場となった函館に徳川幕府が築いた我が国最初の西洋式城郭・五稜郭は、幕府の最後の輝きを象徴するとともに、サムライたちの希望の星でもありました。以来、百五十余年、今も静かに函館の四季の中で輝き続けています。北の大地に刻まれた巨大な星、五稜郭と函館の歴史の移り変わりを展望台で実感してみませんか。



桜花の五稜郭



錦秋の五稜郭



雪化粧の五稜郭

五稜郭歴史 ガイドツアー 毎日実施中

展望料金に 200 円追加で、エレベータースタッフが、展望台にて五稜郭や箱館戦争についてご案内する約 30 分の歴史ガイドツアーです。毎日 9 時～17 時(冬季は 10 時～16 時)の毎時 00 分に実施中です。
☆詳しくはお問合せください☆

※ 1 回 20 名様まで。(当日以外のご予約も可能です)



最新情報は、公式ウェブサイト、Facebook
Instagram から発信しています☆
www.goryokaku-tower.co.jp



五稜郭タワー

函館市五稜郭町43-9 TEL 0138-51-4785



photograph by Saeru

季刊 [アット・エイチ]

@h

SUMMER 2018

● 発行人
池田 誠 (HIF)

● 編集人
中村ひでのり

● 編集スタッフ
齊藤美悠
趙 喜蓮

● デザイン
中村事務所

● 撮影
saeru
田中樹里

● イラストレーション
国立朋佳(表紙・目次)
H.Nakamura(本文)

● サポーター会員(敬称略)
稲泉省 / 鈴木昭次 / 前岡一郎
松本百合 / 川上 納 / 田中真一
山下淳一

● 連載 & 編集協力(敬称略)
中川大介
長谷山裕一
堺 麻那

● 連載(敬称略)
西野鷹志
庄司 証
小宮伸二 / 押野友美
米田哲平 / 近藤 緑
夏井俊介 / ふくだたくま

[@h] 設置場所

【全店配布】ラッキービエロ/ハセガワストア/郵便局(一部)/生活協同組合コープさっぽろ/みちのく銀行/道南うみ街信用金庫/町会会館(一部)/美容室アイズ

【本町・五稜郭付近エリア】函館市芸術ホール/函館市中央図書館/総合保健センター/北海道新聞社(道新文化センター)/函館YWCA/レストランバスコ/ワーカースコープ/茜/シネマアイリス/函館市青年センター/北海道教育大学函館校/Colz/Bees.Bee/函館短期大学付設調理製菓専門学校/クラブカットE/おおわき整形外科/喫茶Canvas/夏井珈琲ブリュッレ/ちいさなしあわせパン/G スクエア

【函館駅前付近エリア】函館市役所/工房虹と夢/Pizzeria AMORINO/NHK/千歳図書館/サンフレ函館/函館駅前バス案内・待合所/函館市総合福祉センター/百聞

【美原・本通・中道・桔梗付近エリア】美原図書館/亀田支所/渡島総合振興局/ROYAL SKOOL/水花月茶寮/ドゥアンジュ/花の湯/Cafeen/桔梗配本所(桔梗母と子の家)/LADIGUE/珈琲物語/Pizza and BIANCHI/チッチョ/パスティッチョ/公立はこだて未来大学/お総菜大地/文教堂桔梗店/三省堂/タイヤ館函館本通店/亀田公民館/わっとな/ファイヤービット/おしま地域療育センター/函館葛屋書店 FUSU スプリングボードユニティ21

【西部地区エリア】北海道国際交流センター(HIF)/Pain屋/ふるる函館/MOSSTREES/金森赤レンガ倉庫/FMいるか/パル・レストラン・ラ・コンチャ/甘味茶房花かんろ/Old Miss 菊/ギャラリー村岡/金子眼鏡店/カフェやまじょう/ロシア極東連邦総合大学函館校/Cafeteria Morie/函館市女性センター/はこだて工芸舎/函館市公民館/函館市地域交流まちづくりセンター/ROMANTICO ROMANTICA/Select Coffee Shop Peacepiece/和雑貨いろは/カフェ三日月/TACHIKAWA CAFE Restaurant Maison/Cafe & Deli MARUSEN/函館園フリースクールすまいる/バザール・バザール/Cafe Classic/マーズカフェ/箱館元町珈琲店/カフェDici/SMALL TOWN HOSTEL Hakodate/tombolo

【五稜郭駅・昭和エリア】Beauty Concierge AOKI/こじまキッズクリニック/港図書館/タマツ電機/北海道大学水産学部/函館市亀田青少年会館/Seak

【山の手・湯の川・旭岡付近エリア】旭岡図書館/銭亀沢支所/函館市民会館/湯川支所/湯川図書館/函館大学/函館短期大学/函館工業高等専門学校/山の手温泉/花園温泉

【北斗市エリア】北斗市役所/かなで〜る/LEAVES/しんわの湯/北斗市スポーツセンター/北斗市公民館/久根別住民センター <〜みん/>七重浜住民センター れいんぼー/Coing

【七飯・大沼エリア】こなひき小屋/ななえ天然温泉ゆうひの館/七飯町文化センター/大中山コン/ドゥ・エ・タン/ドゥル洋菓子店・マルス店/レストランピノ/宮崎屋/南北北海道大沼婦人会館/カントリーキッチンWALD/大沼国際交流プラザ/ネイバル森/foufou/Studio Lumier/七飯町役場/大沼国際セミナーハウス/おぼ製パン

いろんなこと、募集しています!



● [@h] はおおぜいの方々のボランティアによって支えられています。安定した運営のため、広告の掲載、または協賛してくださる方(サポーター会員)を募集しております。年会費は一口、団体 / ￥10000、個人 / ￥3000です。みなさんのご理解とご協力、よろしくお願いします。なお、広告の掲載料につきましては事務局までお問合せください。

● 編集部では読者のみなさまからのご意見・ご感想、さまざまな情報をお待ちしております。お気軽にお寄せください。ご協力よろしくお願いします。

【@h 編集部事務局】

TEL. 0138-22-0770 FAX. 0138-22-0660
E-mail volut@hif.or.jp <http://www.hif.or.jp/volut/>

禁・無断転載